

- 身近な益虫たち -

カイガラムシ

世界の3大益虫は「カイコ」「ミツバチ」と、もうひとつは日本には生息していないのであまり知られていませんが「ラックカイガラムシ」といわれています。ラックカイガラムシのロウ物質と色素物質を精製した「シェラック」は医薬品や食品のコーティング材、あるいはニス、ワックスなどの工業用品として幅広く使われています。

カイガラムシの種類は非常に多く、その多くは樹木類の害虫として嫌われています。アリマキやウンカと同じ仲間ですが、自らが分泌したロウ物質やワックス物質で体の表面を覆い、カイガラを背負っているように見えるため「カイガラムシ」と呼ばれています。多くのカイガラムシでは、卵から孵った一齢幼虫は少し移動することができますが、その後は脚や触覚、複眼も退化し、固着生活を送ります。一部の雄では、羽化すると翅が生えて飛んで移動しますが、雌成虫とは似ても似つかぬ形をしています。それでもしっかり雌を見つけて交尾をした雄は一日前後で死んでしまいます。体表を覆う「カイガラ」は吸汁した樹液の余った栄養分と排泄物からできています。

日本にも生息する「イボタロウムシ」はモクセイ科の樹木に寄生するカタカイガラムシの仲間、イボタノキやライラック、トネリコなどに普通に見られます。かれらが分泌する「カイガラ」を加熱して溶かし、布などで漉して冷やすとイボタ^{ろう}蠟、あるいは白ロウという蠟が精製されます。イボタ蠟は融点が高く、夏でも溶けないのでべとつくことがなく、昔から刀や仏像、桐箆笥などの木工製品や生糸製品のつや出しや敷居や木ねじのすべり用に利用されてきました。精密機械用ワックスなど工業用としても使われており、また止血や強壮など、医薬品としても利用されています。難防除害虫としてみんなを困らせているカイガラムシですが、他の種類でも有効利用できる方法があればいいですね。

イボタロウムシの名前は「いぼ太郎虫」ではなく、「イボタ」の木につく「蠟虫」の意味です。ちなみに薄羽蜻蛉（ウスバカゲロウ）も薄馬鹿下郎ではありません。



(淡路農業技術センター農業部 二井清友)